

## 歌の賞味期限

斎藤美衣

詩人の長田弘は、『読書からはじまる』で「読んだら忘れてしまえるというのが、本のもっているもつとも優れたちからです」と言っている。本は忘れるから取っておく、忘れるちからのために、再読のチャンスのために取っておくのだと言う。

短歌という詩形について考えても、たかさんの歌が日々作られ、読まれていくと同時に忘れられる。それをちからと捉え、歌が再び読まれる文化を作ること大切だと思う。

松村正直が『踊り場からの眺め』で、「結社が果たすべき役割は何かと考えれば、その一つは良い歌を残すということになるだろう」と述べている。個人単位で再び作品と出会う機会を持つだけではなく、結社というしくみのちからで作品を世に出す、長く記憶に留める機能があると言える。

一昨年、「路上」が一五〇号をもって終刊した。「路上」は、佐藤通雅が一九六六年から五十五年間発行してきた個人編集誌だ。短歌作品のみならず、俳句、詩、評論、エッセイなど多岐に渡った内容で、一五〇号では創

刊号からの総目次が掲載されている。六十ページにわたる目次を読むと、その年月と仕事の膨大さに圧倒される。半世紀以上も発行し続けたということは、それだけ長くたくさんの人に読まれたということだ。同時に、多くの書き手が作品を発表したことになる。この巻末に掲載された執筆者の名前が長く並んでいる様は圧巻だ。

落ち鮎を百尾開きて干すと云ふ友ありて  
その五枚を貰ふ

河合利子  
ものなべて底をもつ世に十月は響なぎの底  
にしづんでゐよう 印出美由紀

箱を開け五歳息のむ横顔よこれこれこれ  
が見たかつたのだ 松岡綾子

「コスモス」二月号から三首挙げた。河合利子作品、落ち鮎は産卵のために川を下る鮎のこと。百尾という数とそれを一つ一つ開いた手の仕事にひとりの人となり、そして土地の風土を想像する。印出美由紀の歌では、上句の哲学的な感覚に惹かれる。松岡綾子作品は、「これこれこれ」のユーモラスな韻律と幼い子どもの驚いている様子が呼応する。箱

の中身にも読者の想像は膨らむ。

毎月十首の作品を送る、それが数ヶ月後の誌面に掲載される。入会したばかりの頃には、詠草の十首のうち何首が掲載されているかわかりが気になったが、毎月の詠草を掲載することは、結社誌のほんの一部の機能でしかないと思ふ。結社では、歌壇の中心とは別の場所ですぐれた作品を読み継ぐための工夫がなされている。

スピードの加速する社会において、短歌も目まぐるしく生まれ、読まれ、忘れられていってしまうのではないかと時折感じる。たかさんの歌集が毎月出版され、各短歌総合誌にも毎月読みきれないほどの特集、作品が掲載される。ツイッターなどのSNSではさらに顕著で、投稿された作品は毎秒毎秒タイムラインに流れていってしまう。

よい歌を作るには、まずはよい読者になることが大切ではないか。よい読者とは、作品の良し悪しを見極める批評眼はもちろんだが、忘れても再び作品に出会う営みを忘れない、それを続ける姿勢だ。

歌の賞味期限を決めるのは読者である。一人の読者として批評の目を育てながら、歌壇の中心にあるかないかに関わらず、すぐれた作品には何度でも会いに行こう。